

柳川市における水辺の景観づくりの提案

崇城大学工学部 ○学生会員 龍 良典
 崇城大学工学部 正会員 森山聡之

1. はじめに

福岡県柳川市は、平成 17 年 3 月に三市二町村合併し、新柳川市となった。総延長 470km にもなる堀割（水路）が巡る、全国でも有名な観光地である。しかし、現在観光客数も年間 100 万人超えはしているものの年々減少傾向にある。その原因としては現在ある施設等では物足りなさが感じられ、もう一度訪れたいと思えるような象徴的なものがないことが考えられる。現在、福岡県大牟田市から大川市に抜ける「有明沿岸道路」の整備と平行して西鉄柳川駅東区画区画整理事業が進められている。そこで、本研究は、もう一度訪れたいと思えるようなまちづくりを目標とし、柳川の象徴ともいえる堀割に注目して、年間に行われている行事や祭りから経済効果を分析し、そこから見える堀割を生かした水辺の景観づくりの提案を行う。

2. 柳川市について

福岡県柳川市は、県南筑後平野の西南隅に位置していて、本市の大部分は有明海を干拓して造成された土地である。標高 0～5.6m である。平坦な低地で緩やかな傾斜で有明海に向かって広がっている。この地方は最も干潮時には大きい海域で、大潮時の干潮差が 6cm にも達する。表土以下 10 数 m は地下に海水が浸透するのを防ぎ、海岸沿いでの水田耕作を可能にしている。地下水涵養は常時、素堀の河川や堀割が受け持ち、また水位の上昇による遊水もこれらの堀割が受け持っている。

3. 調査方法

本研究は、平成元年から 16 年度における観光動態調査の資料をもとに堀割がもたらす経済効果を調査した。同時に、柳川市古文書館や柳川城跡で情報を調査した。

4. 調査結果

(1) 柳川城について



写真 1 焼ける前の柳川城



写真 2 柳川城跡石垣

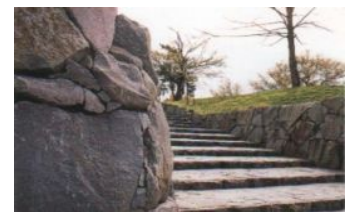


写真 3 柳川城本丸跡

柳川城は永禄年中、蒲池鑑盛（あきもり）によって本格的な城として造られたもので天然の要害である。一説では、鑑盛の 4 代前の治久によって造られていたという。水の利を生かした平城で堀割をめぐらし、扉の開閉によって城内の水が増減できるようになっていた。天正 15 年（1587）立花宗茂が豊臣秀吉の九州平定に際して、その功により筑前立花より 19 歳で当地にうつされたが、慶長 5 年（1600）関ヶ原の戦いにおいて西軍に組みしたため 13 年にして解任され、この後に岡崎城主田中吉政が筑後 32 万石余の領主として入国した。明治の廃藩になるまで、高い石垣と五層の天守閣（写真 1）があり、地上約 50m にもなる城があったという。しかし、明治 5 年（1872）1 月 18 日夕刻炎上し焼失してしまった。現在は、柳城中学校の一角に小高い山と石垣の一部（写真 2）が残るのみである。石垣については、明治 7 年（1874）の台風により海岸堤防が決壊したためその補強に転用された。

(2) 経済効果の分析

平成 16 年度観光客動態調査¹⁾によると、観光客数は、平成 4 年から平成 10 年にかけて、約 120 万人から約 105 万人と若干減少している。しかし毎年 100 万人規模の観光客入込で推移している。主要な観光施設の利用者数の推移は、簡易保険センターの利用者が多く、御花*が約 25～30 万人、川下りが 30～40 万人である。昨年度に比べ入込客約 13 万 1200 人増加している。減少幅は、鉄道、大型バスが 3 万 2 千人程度である。川下り利用者の変動は、昨年比約 5 万 5 千人の減少している。団体客は、3 万人減少している。資料館は、各資料館ともに横這い傾向にある。古文書館が微増している。イベント時期（さげもん—3 月・白秋祭—11 月）は、他の月と比べると観光客が多い。夏季（7～9 月）の観光客が少ないなどが挙げられる。気候のよい春や秋の観光客が多いものの特徴で、春のさげもんまつりや沖端水天宮祭、秋の白秋祭などの伝統行事やイベントによる誘客効果も現れているものと考えられる。観光客は 40～50 歳代の中高年層が多く、九州地区などの近隣からの入込が中心である。

5. 考察

図 3 に示すように、福岡県大牟田市から柳川市を抜け大川市につながる「有明沿岸道路」の整備が進められている。この道路が開通すれば、時間短縮が可能になり、地方からの観光客の増加も見込めると考えられる。さらに、経済効果を見据えた水辺の景観づくりとして、柳川城を復元の提案を考えている。柳川城の復元には利点があると思われる。有明粘土層という地層の上に、約 50m もの高さの城が 250 年間もの間、傾くことなく建つための土木技術を知ることが可能であろう。一説によるとオランダ人の技術が使われているという。柳川城については、蒲池氏や田中吉政、立花宗茂を調査すれば築城当時の技術を知ることができる。ただ、柳川城に関する資料が少なく、閲覧した資料には、柳川城を築城した当時の基礎部分の詳細までは記述されていなかった。

柳川城があることで堀割の価値観も変わってくると考えられる。

6. 今後の研究課題

今回の研究では、経済効果、柳川城跡調査、イメージ調査を行った。さらに、崇城大学生を対象にしたアンケートを集計し、現在の学生が柳川についてどういうイメージを持っているか傾向を把握した上で、より本格的な提案を行う必要がある。また、CVM（仮想評価法）を用い、実際に柳川市に住む住民に対して、アンケート調査を行っていく必要があると考えられる。

参考文献

- 1) 平成 16 年度観光客動態調査（1 月～12 月） 柳川商工会議所

*御花とは、藩主の別邸として、元禄 10 年（1697 年）に建造された。7,000 坪の広大な敷地には、日本三景の一つ松島を模した庭園「松濤園」があり、国指定の名勝となっている。また、隣接する西洋館は、明治 43 年（1910）に完成したものである。

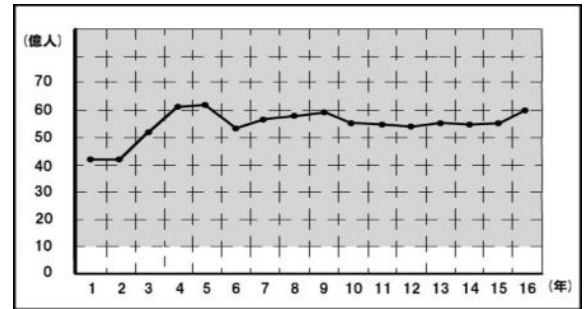


図 1 年間消費額推移

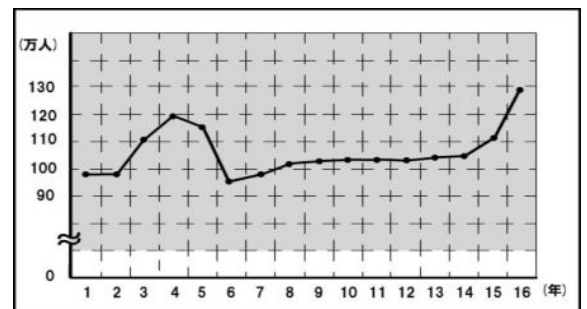


図 2 入込観光客推移



写真 4 柳川城模型



図 3 有明沿岸道路